

窮すれば通ず？

「窮すれば通ず」という格言があります。この意味するところは、「事態が行き詰まって困りきると、かえって思いがけない活路が開けてくるものである」ということですが、果たしてどうでしょうか。

現実には、そうは巧くいかないことが多いように思います。資金繰りに窮した会社が、ついには倒産せざるを得ないといったケースは後を絶ちません。自分の経験でも、事態に窮した時に思わぬところで助け船が来たりすることがなかったわけではありませんが、状況を改善できず、失敗したり、諦めてしまったことも沢山ありました。

だから、私などは、窮しても通じないことがあると、いつも覚悟をしています。

しかし、最近になって、誠にお恥ずかしいことですが、「窮すれば通ず」という言葉には大事なことが抜けているということを知りました。それは「変化」ということです。

もともと「窮すれば通ず」というのは「易経」という本の中の一節です。この「易経」というのは、古代中国の占の書で、そこではこう書かれています。「神農氏没して、黄帝堯舜氏作る(おこる)。その変を通じ、民をして倦まざらしめ、神にしてこれを化し、民をしてこれを宜しくせしむ。易は窮まれば変じ、変ずれば通じ、通ずればひさし。(岩波文庫「易経上」)」

何か凄く難しそうですが、大事なところは「窮まれば変じ、変ずれば通ず」というところです。

行き詰まった状態の中でも、自分の考えに固執したり、自分の立場や利益を守ろうとし、結果、失敗したり破綻してしまうケースが少なくありません。

しかしそれは、如何なる事態も変化していくものだ、ということに目が向いていないということなのだと思います。一見、絡まった糸のように複雑で、自

分では進退窮まった状態のように見える事態であっても、それを取り巻く状況は変化していくものであり、自分自身もまた変化の中に身を置いてこそ、新しい道が開けてくるということではないかと思います。

確かに、デットロックに乗り上げたような事態であっても、自分の立つ位置や発想を変えてみると、今まで見えてこなかった道が見えてくる。そうすると、実は相手も変わろうとしていたことが分かったりする。そうした変化を見極めていく知恵と度量が必要だと思います。勿論、それは、変化に流されるということとは違います。自分を見失えば漂流するしかないのですから。

「変わる」ことに対して、恐れず立ち向かう勇気とエネルギーがあれば、余程のことがあっても乗り越えられる。

それが「窮すれば通ず」ということなのだと、改めて感じているところです。

(塾頭 吉田 洋一)